

氏名	平田美千子
学位の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	甲文第85号(文部科学省への報告番号甲第315号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年3月3日
学位論文題目	The Mission of the Innocent American Stranger —The Changes of Humor and Its Climax in Mark Twain's Travel Writings—
論文審査委員	(主査) 教授 花岡 秀 (副査) 教授 小澤 博 教授 水野 尚

### 論文内容の要旨

平田美千子氏の学位申請論文は、序章、本章6章、終章から成り、マーク・トウェイン (Mark Twain) の旅行記、*The Innocent Abroad, Roughing It, A Tramp Abroad, Life on the Mississippi, Following the Equator* の5作を取り上げ、それぞれの作品の特徴となっているユーモアの表現に着目し、そのユーモア表現の変化を検証するとともに、その変化の背後にあるものを探ろうとするものである。分析にあたっては、それぞれの旅行記に登場するアメリカ人旅行者をマーク・トウェインの「ペルソナ」として捉え、そのペルソナが語るユーモア、ペルソナの「よそ者」としての立場、アメリカとその価値観への信頼の変化が、作者自身の心理や置かれた状況を反映していることを明らかにしようとするものである。

序章では、論文全体の展望が示される。トウェイン初期の旅行記、*The Innocent Abroad, Roughing It* では、アメリカ人旅行者であるマーク・トウェインの「ペルソナ」の「よそ者」としての立場、アメリカとその価値観に対する揺るがぬ信頼、笑いのユーモアに溢れた語りが最大の魅力となっているが、後期の旅行記、*A Tramp Abroad, Life on the Mississippi, Following the Equator* へと進むにつれて、ユーモアそのものの勢いや魅力が薄れていくことを指摘し、その原因が「よそ者」としてのペルソナの立場、アメリカの価値観への信頼、あるいは作家自身の心理や置かれた状況の変化にあるとする。

第1章は、19世紀後半のアメリカ人の旧世界、すなわちヨーロッパへの旅行の意味を確認するとともに、トウェインの旅行記全般が内包している問題点を指摘する。トウェインの旅行記には他の作家の旅行記からの引用や挿話の援用が頻繁に認められるが、これは17世紀以来盛んとなった西欧の旅行記の様式を受け継ぐもので、作品の評価をめぐってはこの点を考慮すべきであると論じている。

第2章では、*The Innocent Abroad* が取り上げられ、この作品にイノセントなアメリカ人旅行者としてのトウェインの「ペルソナ」の完成を認めようとする。作品の後半では、欺瞞に溢れた旧世界への幻滅と憤りによるアイロニーや風刺などの批判的ユーモアも登場するが、それ故に、身勝手に無知なアメリカ人旅行者を批判はしても「ペルソナ」のアメリカ的価値観は肯定され、この旅行記がアメリカの力強さを強調することに成功していると指摘する。

第3章は、*Roughing It* の考察を展開する。「東部人」であった「ペルソナ」が「西部」での生活を経験することによって、意識の中で東部と西部の融合を確認し、アメリカ人としてのトウェインの「ペルソナ」の誕生を認識することになることを明らかにすると同時に、この「ペルソナ」が、自らのさまざまな失敗や経

験によって成長を遂げ、それ故に、逆に、最終的には「ペルソナ」としてのイノセンスを失うことになる軌跡を辿ろうとする。

第4章は、*A Tramp Abroad* についての考察へと進む。トウェイン自身が欧州旅行者としての経験を積み重ねたことによって、無邪気なアメリカ人旅行者としての「ペルソナ」は説得力を失ってしまっていたにもかかわらず、この作品でも再度この「ペルソナ」を用いたことによって、鋭い社会批判やアイロニーなどを提示することができず、結果として中途半端な作品となってしまっていることを指摘する。旧世界と新世界という、ヨーロッパとアメリカの境界が「ペルソナ」の心理の中で融解しつつあることを検証し、この作品では「ペルソナ」の役割がほとんど停止した状態になっていると論を結んでいる。

第5章では、*Life on the Mississippi* の分析が成される。時代背景が *Roughing It* よりも昔に設定された、「ペルソナ」が経験を積む前のまだイノセントであった作品の前半部分では、笑いのユーモアは安定して、「ペルソナ」と登場する水先案内人たちは自身に溢れ、ミシシッピ川は力強いアメリカを象徴するものとして描き出される。しかし、水先案内の技術を修得し、すでに経験を積んだ「ペルソナ」が語る後半の部分は、ミシシッピ川の近代化に対する戸惑い、沿岸の社会の現実に対する幻滅がその基調を成し、「ペルソナ」の川への信頼は揺るぎ、さらにはアメリカそのものに対する自信にも陰りが認められるようになる。この旅行記の終盤では、トウェインの旅行記の要となるユーモアは完全に消滅し、トウェイン自身のアメリカに対する不信感の萌芽が認められることをこの章は指摘する。

第6章では、最後の旅行記 *Following the Equator* が取り上げられる。この作品では、トウェインの旅行記の要となっていた、「ペルソナ」の「よそ者」としての立場、アメリカとその価値観に対する揺るがぬ信頼、笑いのユーモアに溢れた語りの三つの要素を「ペルソナ」が体現することは不可能となっていることが明らかにされる。帝国主義政策に向かうアメリカの現実を目の当たりにした「ペルソナ」は、アメリカのイノセンスをも否定することになる。「ペルソナ」のアメリカへの自信はその妥当性を失い、作品としてのトウェインの旅行記はその存在意義という点からも、終わりを迎えることになったことが、明らかにされる。

終章では、あらためてトウェインの旅行記の終焉の意味が問い直されている。

## 論文審査結果の要旨

平田美千子氏の学位申請論文は、氏の本学博士課程前期課程および後期課程を通してのトウェイン研究、さらに、その後のニューヨーク市立大学クイーンズ校大学院修士課程修了にあたって提出された修士論文を発展させてまとめあげられたものである。序章、本論6章、終章から成る本論文は、現代アメリカ小説に計り知れぬ程の影響を与えている、きわめて重要な19世紀アメリカ作家、マーク・トウェイン (Mark Twain) の旅行記、*The Innocent Abroad*, *Roughing It*, *A Tramp Abroad*, *Life on the Mississippi*, *Following the Equator* の5作を取り上げて、トウェインの旅行記が提起する様々な問題を検証しようとするものである。

平田氏の学位申請論文は「無垢な、よそ者としてのアメリカ人」というタイトルの一部からも窺えるように、トウェインの旅行記を、19世紀後半から20世紀初頭のアメリカの状況、アメリカとヨーロッパとの関係を背景に据えて、大きなコンテキストの中で捉え、トウェイン文学、強いてはアメリカ文学全体におけるその位置づけと評価を試みようとしたところに、その特質と意義が認められる。19世紀後半のアメリカは、「マニフェスト・デスティニー」という標語に象徴されるように、アメリカが西漸運動によって領土を拡大し、国家としての自信を確固たるものにしていく一方で、農業中心から工業中心の社会へと目まぐるしい変貌を遂げた時期であった。この時代は、旧世界であるヨーロッパに見られるさまざまな汚れから隔てられた、無垢なアメリカ人としてのアイデンティティにまつわる神話が徐々に崩壊して行く過程でもあった。やがて、アメリカは「アメリカ進歩主義」という標語のもとに資本と生産が集中、強化され、物質的豊かさをなりふり構わ

ず追求する20世紀へと突入することになったのであるが、このようなアメリカの変化、変貌の最中を生きたトウェインを視野に入れながら、平田氏はその旅行記を検証しようとする。

平田氏の論文の特質は、旅行記に登場するアメリカ人旅行者をトウェインの「ペルソナ」として捉え、その「ペルソナ」の変化を作家トウェインに重ね合わせようとする点にある。*The Innocent Abroad*, から始まり *Roughing It*, *A Tramp Abroad*, *Life on the Mississippi*, を経て *Following the Equator* に至るその旅行記の変化に、「よそ者」としての「ペルソナ」の確立から消滅、旧世界に対するアイロニーや風刺などの批判的ユーモアの力強さの衰微、「ペルソナ」のイノセントな資質とアメリカの価値観への信頼の消滅を読み取る点に、本論文の幅の広さが認められる。一作家の旅行記に見られる変化にアメリカ文化の全体的な変化を読み取ろうとした点は評価に値する。

また、さらに本論を興味深いものとしているのは、その分析に当たって、トウェイン文学の本質と深く関わるユーモアに焦点を絞っている点でもある。そもそも、トウェインの文学が、18世紀前半のアメリカ南西部地域ユーモア文学と密接な関係を持つことを考慮すれば、作品に表われているユーモアがその文学の検証に当たっては重要な意味をもつことは当然のことであろうが、旅行記の考察にもユーモアの分析を援用したことが、本論を厚みの深い考察にしていると言えよう。ユーモアとは、人種、言語、生活習慣、人間の思考といった文化、社会を映し出すものであるが、平田氏は、旅行記に表われたユーモアの力強さ、効果の衰退の過程に、帝国主義に向かうアメリカの現実を目の当たりにした「ペルソナ」のアメリカそのものに対する不信感の萌芽とその増大を読み取ろうとする。結論としては、「ペルソナ」のイノセントな「よそ者」としての立場、ユーモア、アメリカの価値観に対する信頼は完全に消滅し、トウェインの旅行記は終焉を迎えたと結論づけているが、これは、最終的にはペシズムに深く彩られたトウェイン文学全体の変化とも重なり合うもので、氏の論考の妥当性を側面から支えるものとなっている。

もっとも、本論に問題がないわけではない。旅行記であるが故にこのような設定が可能になるのであろうが、トウェインの旅行記に登場するアメリカ人旅行者を言わば自明のこととして、トウェインの「ペルソナ」として捉えて論考を進めているが、その妥当性に関しては深く言及されていない。たしかに、このような「ペルソナ」を設定することにより、作家とテキスト、あるいはテキストの語り手が孕む多くの厄介な問題に関する考察をある程度回避できる利点はあるが、それでも論の精緻さという点からすれば、ある種の曖昧さを常に引きずった考察となってしまう危険性を否定できない。考察の焦点となるユーモアそのものについても、本論で着目する範囲内でもその概念規定に不安が残る。また、たとえば、*The Innocent Abroad*, と *Life on the Mississippi* のように、旅行する場所が国内と国外の旅行記を並列して、同じ視点から分析する危険性に関しては、十分な考慮が払われているとは言えない点も問題となろう。それは、アメリカ人のイノセンスという概念、あるいは神話は、当然のことながら旧世界、ヨーロッパという鏡を設定して初めて意味をもつものであるためである。テキストそのものに関する分析の甘さも散見される。しかし、これらの問題点は、本論の博士学位請求論文の価値を決して損なうものではない。トウェインの旅行記を、トウェイン文学の核の部分と深く関わるユーモアという視点を設定し、出版に関する時系列で考察し、幅広いコンテキストから検証しようとした本論は、日本においてはまだまだ十分な注意が払われているとは言えないトウェインの旅行記の今後の研究に少なからぬ意味をもつことは明かである。

提出論文の審査委員3名は、論文の審査ならびに2010年2月14日に実施した口頭試問の結果から、平田美千子氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告致します。